

2. 遺跡の概観

A. 遺跡の立地および地理的環境

人間の居住や生産活動の痕跡は、自然条件に支配されて立地する。今から遡ること2000年の昔、弥生時代中期における遺跡の立地は、自然条件に厳しく支配されたものであったことは想像に難くない。ここでは、濃尾平野沖積低地の北東部から中央よりに位置する愛知県海部郡甚目寺町の阿弥陀寺遺跡の地理的環境について、土層断面の記録や周辺部の遺跡調査結果、ボーリング試料などをもとに、平野の形成と弥生時代の遺跡立地を中心に考察する。

基盤の形成 朝日遺跡89A区にて実施したボーリング試料を分析してみると、地表下19.10~10.20m(海拔-17.10~8.20m)の間には、縄文海進期に堆積したと考えられる貝化石を含む厚いシルト層が分布する。本層上部に、6300y.B.P. の年代値を示す純度の高いアカホヤ火山灰層(未発表)が含有されることから、朝日遺跡の付近では、シルト層の堆積は縄文時代早期の頃に開始され、少なくとも6300y.B.P. の頃まで内湾的な環境下にあったことが推定される。その上部の地表下10.20~1.50m(海拔-8.20~+0.5m)に発達する層厚約9mの中~粗粒砂層は沖積上部砂層にあたり、この上面が阿弥陀寺・朝日両遺跡をはじめ、この地域の弥生時代の遺跡の基盤層をなしている。

浜堤列と埋積浅谷 基盤層の高度を詳細に検討してみると、上部砂層の上面は必ずしも平坦ではなく、いくつかの異なった原因によって生成された起伏が存在する。その一つは、原(1978)、井関(1982)、浅井(1988)らによって指摘された北西一南東方向に軸線を持つ三本の凸状の高まり(砂堆)であり、もう一つは本センターの調査結果や井関(1982)、海津(1988)らによって明らかにされた、おおむね北東から南西方向に延長される浅谷群(埋積浅谷)である。

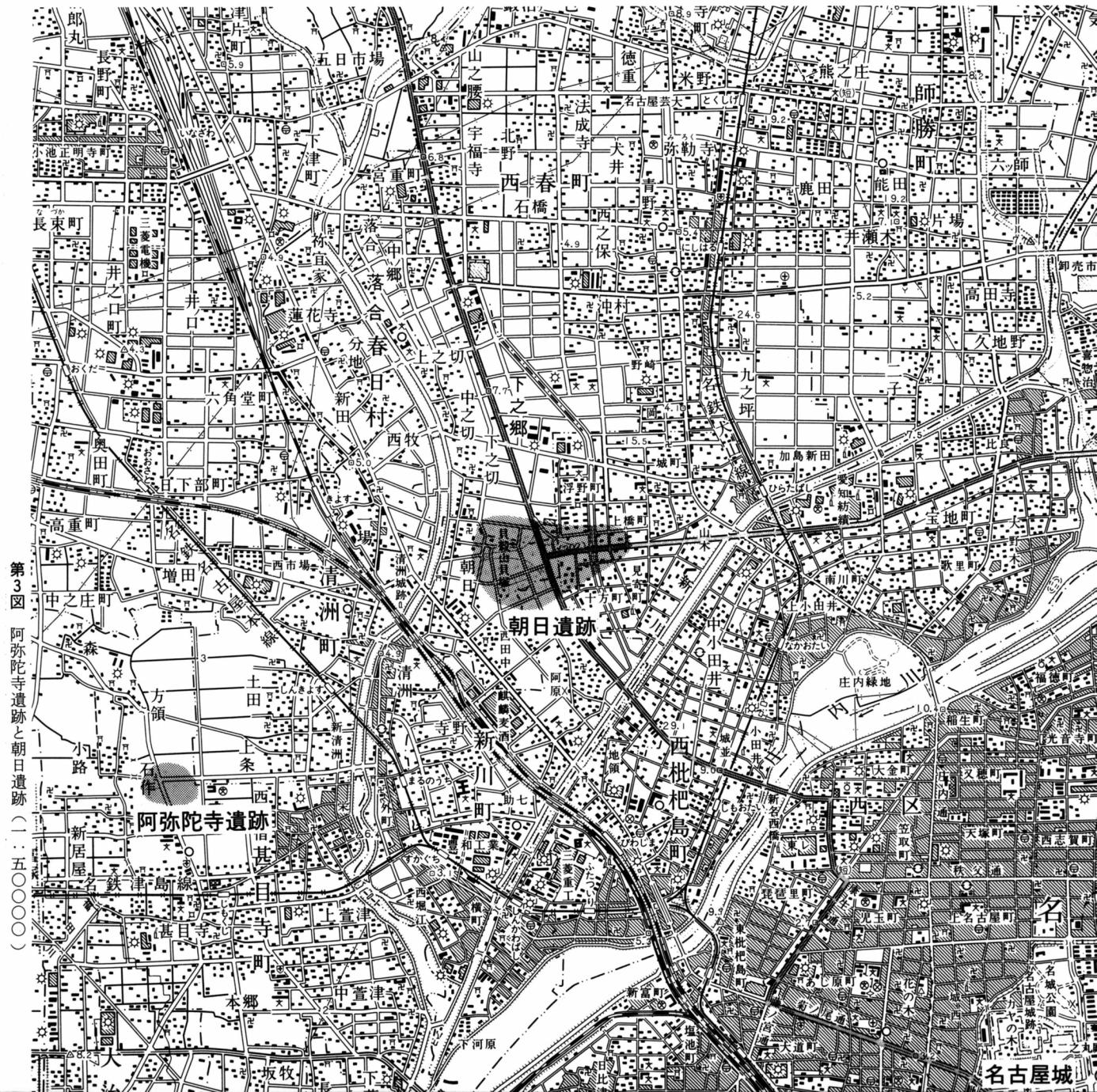
砂堆について筆者は、軸線がこの付近を流れる河道の方向と直交することより河川性の自然堤防とは考えられないこと、また朝日遺跡において旧河道によって砂堆を構成する砂層が削りとられていること、さらに土田遺跡89B区における基盤砂層の粒度分析結果では海浜砂丘の粒度組成を示すこと(森ほか:1990)などより、この砂堆の成因を、縄文海進高潮期以降の海岸線を追って前進・拡大しつつあった「浜堤列」ではないかと考えた。

また、埋積浅谷の生成時期について、その下底の泥炭層中より、 4620 ± 90 y.B.P. (GaK-13397) をはじめ計7点の4000年代を示す放射性炭素年代値が得られたこと(森・伊藤・1989a)、および寒冷地に生息する昆虫化石(アシボソネクイハムシ)が多数発見されることより、浅谷の形成・堆積は少なくとも縄文時代中期の頃に開始されていたことが明らかになった

(森・伊藤：1989b)。

遺跡の立地 これらの事実を整理し、阿弥陀寺遺跡の立地した弥生時代中～後期の頃の地形を概観してみると、阿弥陀寺遺跡は最も海側に位置する浜堤（第一浜堤）上、その北東部には後背湿地をはさんで第二浜堤前面に土田遺跡、同じく第二浜堤の頂部には拠点集落・朝日遺跡が位置していた。朝日遺跡に見られた砂堆が、縄文時代中期に埋積が開始された河道の侵食を受けていることから、第二浜堤列には縄文時代中期以前に作られたものであることがわかる。

阿弥陀寺遺跡の弥生時代住居の床面高度はわずかに+0.4m～-0.3mしかなく、海に面した浜堤上での遺跡の立地を考えれば、当時の地下水位はかなり低下していたものと考えられる。この頃、木曽川はその本流を西進させつつあり、流量の減じた旧五条川はゆったりと遠浅の海に注いでいた。阿弥陀寺遺跡の前面には広大なデルタが展開し、到来する開発の歴史の幕開けを告げていた。



B. 歴史的環境

弥生時代 弥生時代の尾張平野における遺跡分布は、とくに中期に関して、土器や石器などの組み合わせから見て、地区 I ~ 地区 VIIまでの 7 地区に区分することができる⁽¹⁾。

*

地区 I 朝日遺跡を中心とする地区で、伊勢湾地方中期弥生文化の中心地区でもある。阿弥陀寺遺跡もこの地区に含まれ、標高 3 m 以下と非常に低い。

地区 II 勝川遺跡を中心とする地区。地形的に台地部分や河川の氾濫原を含み、地区 I ほどの広域さはない。最近は後期の遺跡が多く発見されている。

第4図 弥生時代中期の尾張平野主要遺跡の位置と地区割り概念図

地区 I

- 1 朝日
- 2 西志賀
- 3 松ノ木
- 4 阿弥陀寺
- 5 森南

地区 II

- 1 勝川

地区 III

- 1 二夕子

地区 IV

- 1 曽野
- 2 大地
- 3 東長畑
- 4 佐野

地区 V

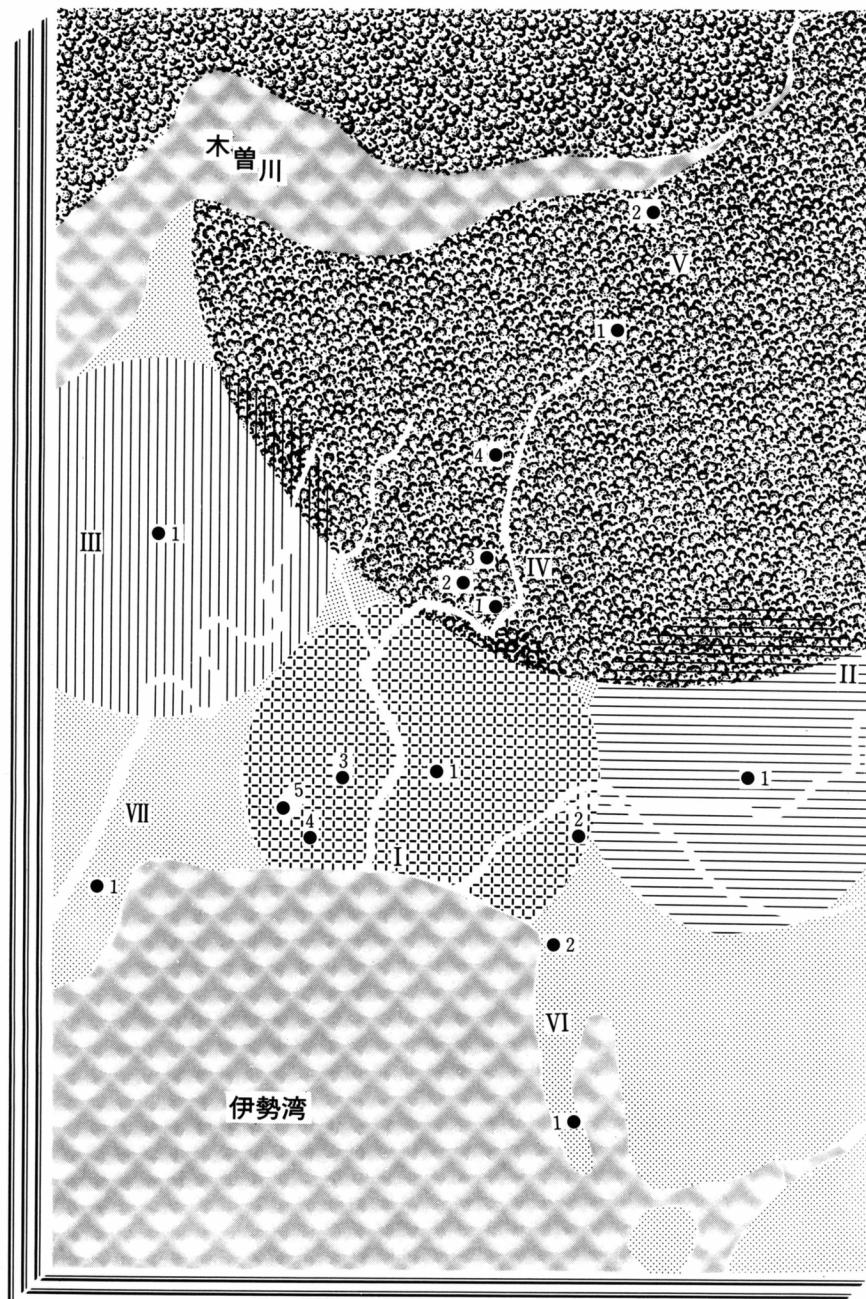
- 1 仁所野
- 2 上野

地区 VI

- 1 高蔵
- 2 三ノ丸

地区 VII

- 1 寺野



地区III 二夕子遺跡を中心とする地区。地区Iと同様低平な平野部。縄文時代晚期から弥生時代前期にかけて在地の伝統を主体に変容した地区である。

地区IV・V 五条川の中・上流域に相当し、縄文時代晚期以来の伝統を残す地区。尾張平野の中期弥生文化の形成に際して無視できない地区。

地区VI 名古屋台地に分布する遺跡を括るが、全体を一つにできるかどうかは確定できない。自立のための農耕基盤を持たない、海に依存するか平野部に依存する地区。

地区VII 調査が不十分で詳細不明。平野部の地区として独立させることができるともしそうないが、現状では不可能。

以上の地区のうち、貝塚・貝層を形成するのは地区Iのみだが、地区VIも本来はあったかもしねれない。

地区Iには、海産物加工を始めとする各種生産活動と物資交換のセンターとしての朝日遺跡があり、阿弥陀寺遺跡はそこから入手していたようだ。また、遺跡周辺が水田開発されれば狩猟・採集が困難となる地区I・地区IIIは、地区II・地区IV・地区V・地区VIとの交換によって自然食料を入手した可能性がある。石材や木材はそれらの地区からの直接入手か、中継による入手であろう。

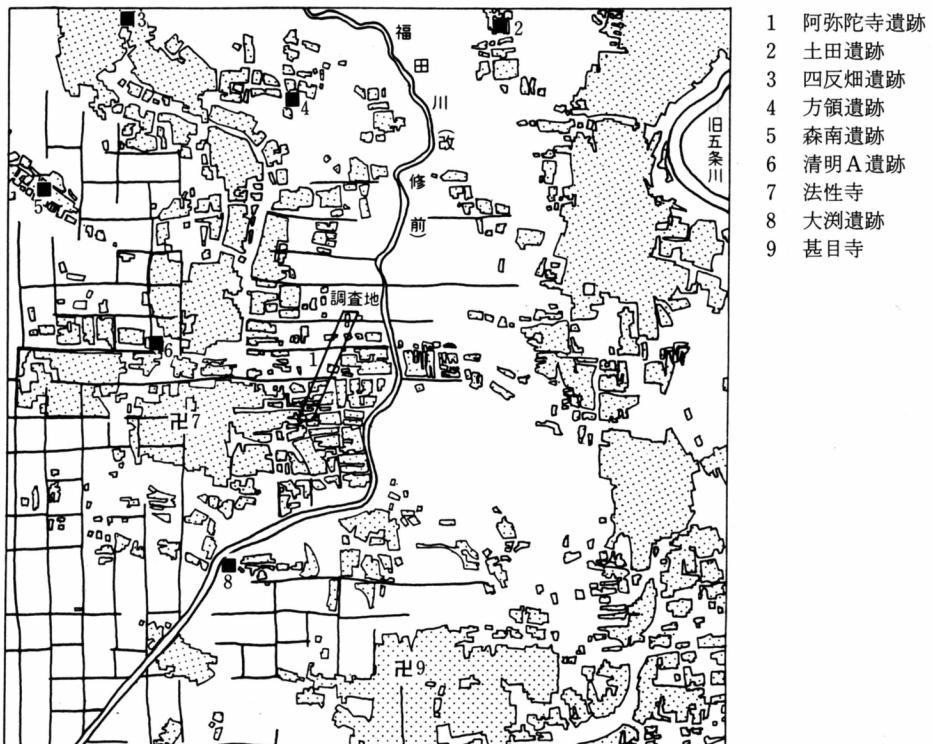
このように、弥生時代の尾張平野部に展開する諸遺跡は、それぞれ異なる特性（エコシステム）を基盤としつつ相互に関係を持って、一つの社会を構成していたと推測する。

鎌倉・室町時代 遺構・遺物がまとまって検出された鎌倉・室町時代（14～15世紀）の周辺遺跡について概観しておきたい。

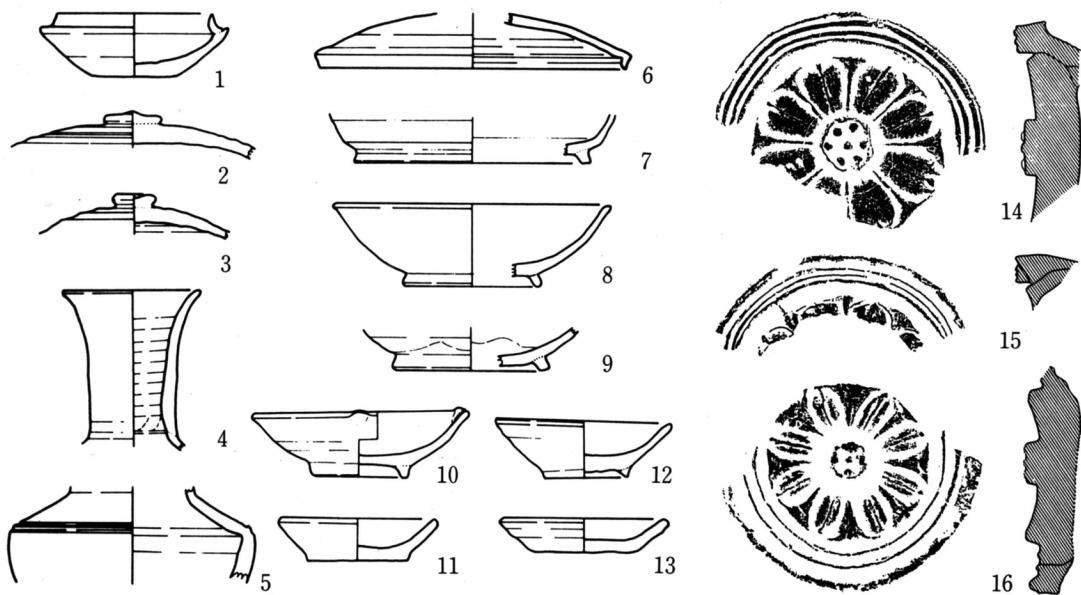
阿弥陀寺遺跡周辺の甚目寺町から海部郡美和町、稻沢市、西春日井郡清洲町にかけては、四反畠遺跡・方領遺跡・甚目寺・清林寺遺跡・法性寺・土田遺跡・廻間遺跡・朝日西遺跡・清洲城下町遺跡等々数多くの遺跡が知られている。ただし発掘調査例は少なく、しかも小面積の調査例がほとんどであり、集落の構造については土田遺跡⁽²⁾を除いては明確ではない。従って、事例の少ない現段階では阿弥陀寺遺跡を上記の遺跡群の動向のなかに位置づけることは難しく、いましばらく資料の蓄積をまちたい。第5図は、遺跡周辺の条里制遺構（地割）の分布を示したものである⁽³⁾。もとよりその形成年代の解明については不分明な点が多いが、その一部が調査区域にかかることからみて、遺跡の歴史的環境として条里制とのかかわりも重視される必要があろう。なお調査区内の条里制遺構については後述するが、その形成年代については、少なくとも14世紀代にさかのぼることが知られたにとどまる。文献史料と遺構・遺物との短絡的な結びつけは避けなければならないが、この点に関連して、最後に文献資料に目をむけておきたい。周知のように遺跡の所在する甚目寺町大字石作は、『和名抄』にみられる「中島郡石作郷」の故地とみる見解が支配的で、さらに調査地の西方100mにある石作神社を『延喜式』にのる式内社の1つである中島郡「石作神社」に比定する説もある。そこで調査にあたっては、「石作郷」が何らかの形であらわれるのではないかとの予見がもたれたが、奈良・平安時代の遺構を認めるにたらず、14～15世紀代

2 遺跡の概観

の遺構・遺物を検出したにとどまった。ただ調査区の西方の現福田川の川岸で古墳時代～平安時代にかけての遺物が表面採集されており、今後その辺りで当該期の遺構が見い出される可能性はある⁽⁴⁾。さらに関連して付記するならば、令制下における石作郷が海部郡ではなく「中島郡」に所属している点も注意すべきであろう。こうした行政領域が遺構・遺物の上に如何に反映されているか、そして調査遺構の年代に近い弘安5年(1282)⁽⁵⁾の段階でもひきつづき中島郡に属していた点が知られる。



第5図 阿弥陀寺遺跡周辺の条里制地割（坪界）



第6図 福田川周辺の採集遺物および甚目寺・法性寺出土軒丸瓦 (1 : 4)

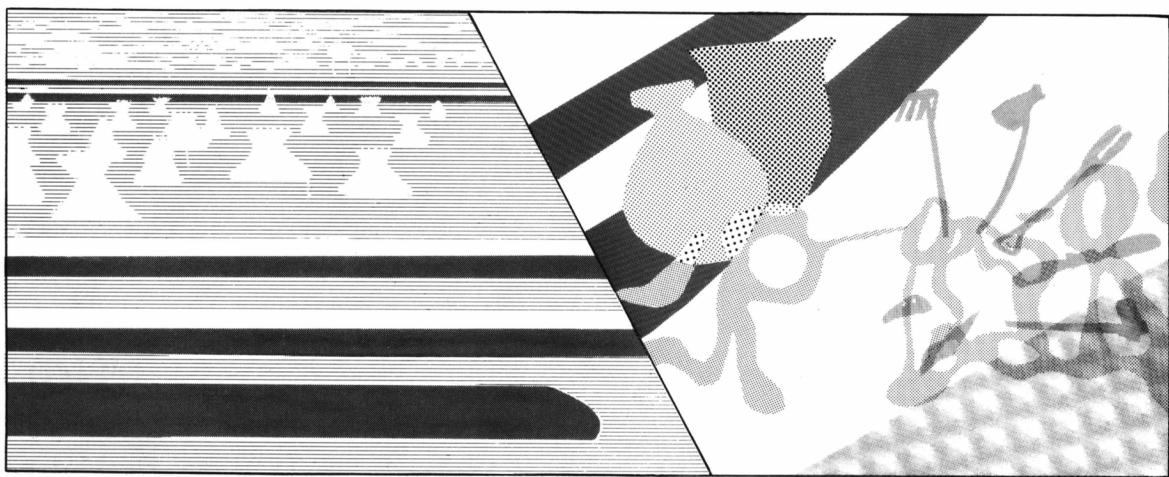
1～13 福田川周辺 14・15 甚目寺 16 法性寺

第二章

調査の成果



1. 層序 ————— 石黒
2. 弥生時代 ————— 石黒
3. 鎌倉・室町時代 ————— 北村



1. 層序

阿弥陀寺遺跡は微高地上に位置している。そして、弥生時代と鎌倉・室町時代では周辺環境が大きく異なる。

弥生時代には、北に広大な湿地が広がる。すぐ南には谷地形があり、そのさらに南には砂丘化した砂堆が展開していたのである。しかし、鎌倉・室町時代になると周囲はほぼ平坦と化していたようで、溝で区切られた屋敷地割り状の地区が広がっている。

遺跡の基盤 巨視的な意味で遺跡の基盤となる層位は、明るい灰色、あるいは青味がかった砂層で、基本的に地表面に露出することはないが、包含層を深くまで下げるときに出でてくる。調査区で言えば、57H区において標高+70cmで砂層の露出があり、しかも冬期の調査で苦労した記憶がある。砂層以外の部分は大体が黄灰色シルト層を基盤とする。けれども層位的には純粹な黄灰色シルト層からなる部分は少なく、厚さも決して厚くない。したがって、垂直的にはシルト層と（粗・細）砂層が交互に縞状に堆積しているのが普通の状態である。

こうした基盤も細かく見れば、時期によって変化する。弥生時代には、地表面の変化さえ促すほどの自然の影響があったようで、また遺跡の周囲もそうした自然の影響を受けやすかったのか、包含層の二次堆積がみられる。つまり、もともと高い微高地も、地表面の侵食が進み周辺地区の堆積を進めたのである。その意味では、当初は決して安定していなかった微高地も順次安定に向かっていったと言えよう。もちろん、安定は一体どのレベルのことを言うのかという問題はあるけれども。

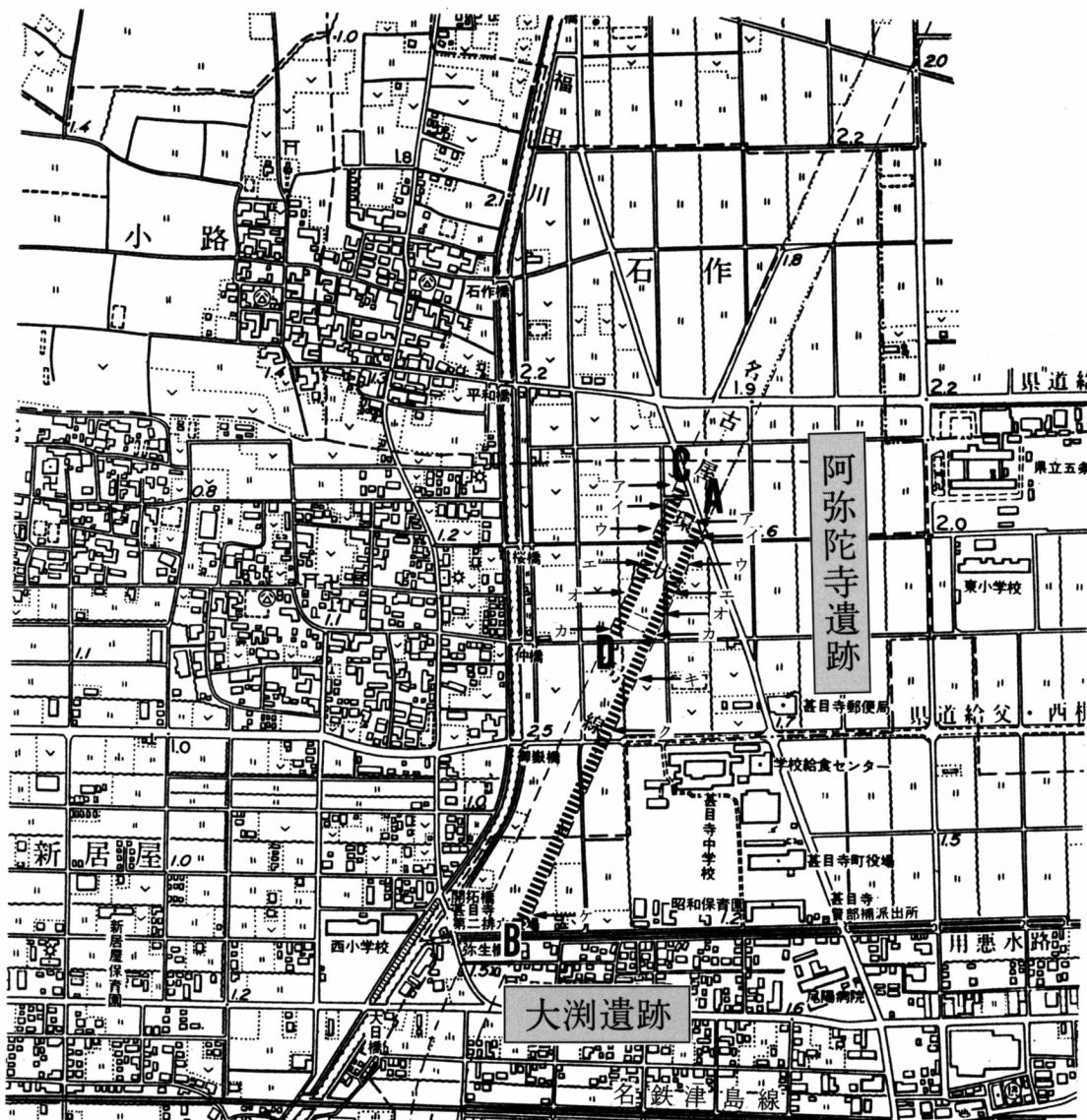
遺跡の基盤は、もともと自然状態であったものを、おそらく遺跡を営んだ人たちが改変することになる。われわれが包含層と呼ぶ層位は、基本的に自然堆積ではない。人間活動による地表面の攪乱にすぎない。地表面の攪乱の集積が包含層なのである。したがって、どこからか土を運んできて積み上げることはない。とするならば、時間的な流れに対応した視点での遺跡の基盤とは、その時々に存在した、平均標高には大きな変動のない、遺構の表面ということになろう。

しかし、阿弥陀寺遺跡では、弥生時代に限らず鎌倉・室町時代においても、本当の意味での当時の地表面は検出できていない。第1の原因は近世の新田開発による削平、第2の原因は戦前の軍事施設（飛行場の滑走路）の建設による削平である。だから、基盤の変化は推定する以外にない。

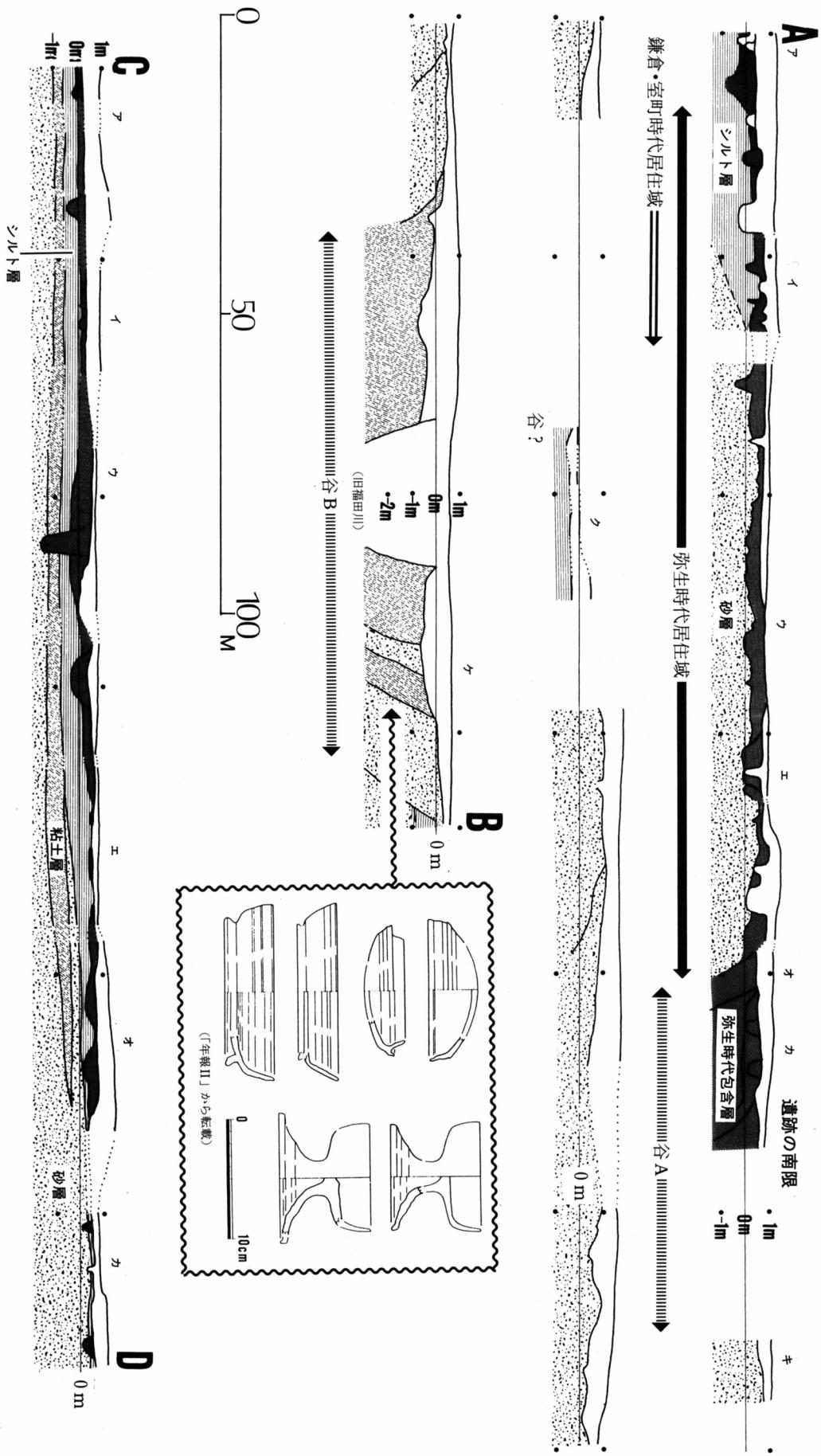
包含層 ところで、弥生時代の包含層が、基本的には人間活動による地表面の攪乱であるといったけれども、この点は鎌倉・室町時代も同じである。弥生時代は当初全くの自然状態であった区域に包含層を形成したのであるが、鎌倉・室町時代は弥生時代の包含層を基盤としてその包含層を形成することになる。ただ、弥生時代と違って鎌倉・室町時代は集落の設計

というような側面がより強く全面に出るから、造成もより大規模となる傾向にある。今回の調査では整地層として確定できる層位の検出はないが、後の削平がなかったなら整地層としての包含層が把握できたであろう。

自然状態 弥生時代と鎌倉・室町時代については、人間活動の確実な痕跡としての遺構が検出できたのだが、それ以外の時期には自然状態における堆積が進行していた。弥生時代の遺構のうち、III期以降の環濠や大規模な土坑内部には鍵層となる黄灰色や灰白色のシルト層が安定的に堆積しており、それらをつなぐことによって一時期の埋没状況を推定することができる。時期は古墳時代前期でも前半期の中で収まる。そして、これらの遺構がそれ以後鎌倉・室町時代までに自然状態で埋没したということは、その期間には人間の立ち寄ることがない区域になっていたということである。



第7図 基本土層図位置図（1：10000）



第8図 基本土層図 タテ1:250 ヨコ1:1000

2. 弥生時代

時期区分 弥生時代の阿弥陀寺遺跡に関する時期区分は、すでに昭和56年度年報で概略的区分を提示し、その後それを補足して現在（I期～IV期の4期区分）に至っている。今回も、とくにその基本的部分の変更は必要としない。ただ、土器の時期細分については新しい知見を得たので、以下でやや詳しく触れることになる。

遺構 遺構は溝（SD）・住居跡（SB）・土坑（SK）など多岐にわたる。ところで、住居跡という認定は単に遺構の形状だけでなく複数の要素をもって決定する必要がある。しかし阿弥陀寺遺跡の調査では、掘形よりも床面を重視して、最低限の認定要件を炭化物の薄い層が一定の範囲でほぼ水平に分布することとした。そのため柱穴や炉跡のないものも住居跡として認定しているし、中には調査時に住居跡とされても平面形が全く不整のものもある。以下報告では、床面と掘形の整合を重視して取捨選択を行った。

150

100

50

0

122

111

103

38

30

6

1

SK

SB

38

30

6

1

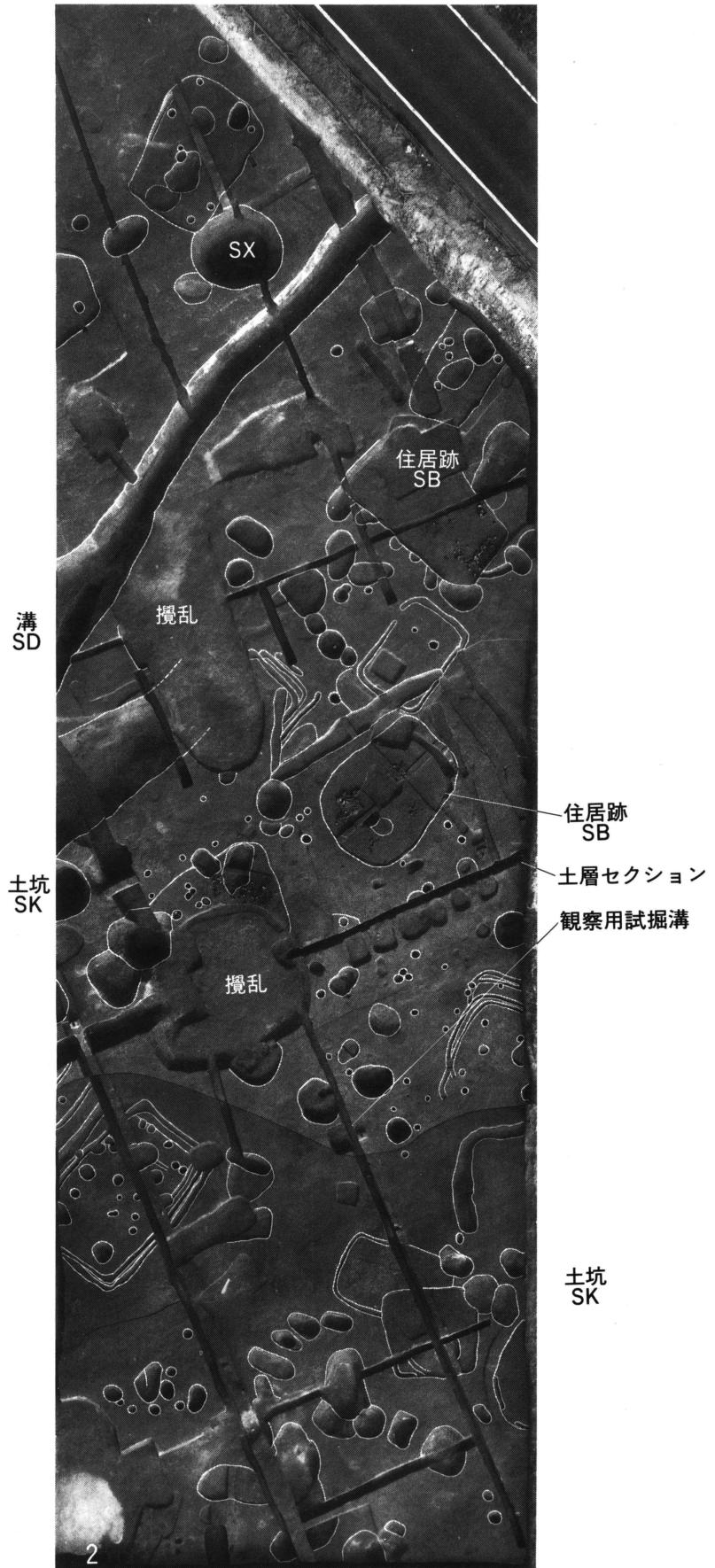
I II III IV

第1表 遺構数の変化

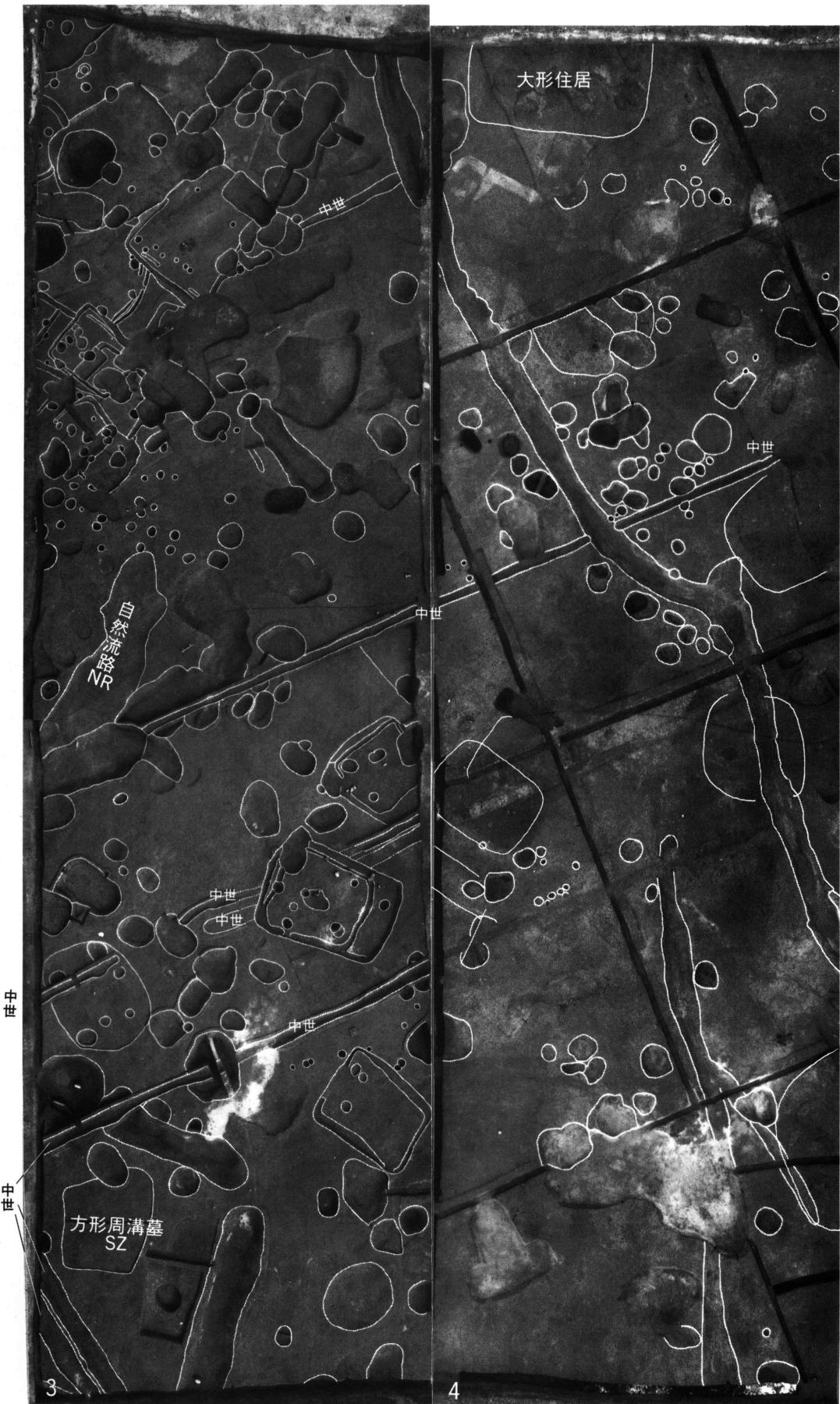
遺構はその時期決定にあたって、出土した土器の時期に多くを頼っている。土器棺などのように時期決定因を内在した構築物であればほぼ同時のものとして考えることもできようが、ほとんどは大地に記された痕跡としての遺構の埋没という一定の時間を経ているのであり、その意味で時間幅を考慮せざるをえないのが実情である。その際たるもののが溝であり、とくに水流があって自然埋没となれば土器が複数の時期にわたることも少なくない。こうした事例で複数の細分時期を遺構に与えることはかえって遺構の存続期間に対する錯覚を与えることになると考える。遺構の時期決定は下限の確定にすぎない。

ところで、遺構で最も多数検出できたのはI期に属す例で、以下時期を経るごとに減少し、IV期になると数えるほどになってしまふ。同様、包含層も時期が下がれば部分的なものになる。これは、阿弥陀寺遺跡が鎌倉・室町時代の集落跡と複合し、さらにその後の水田耕作等による改変によって本来の形状が失われていることにもよる。さらには、遺跡全体の広がりの中での調査区の位置もそうしたありかたを制約している要因であろう。また、遺構すべてが時期決定できたわけではなく、小さな土坑などかなりが時期判定不能となっている。そのため、時期別の記載には対応できないことから省いたものもある。

遺物 遺物は、自身で時期決定できる土器は別として、包含層中から出土する石器に関してはたとえ遺構内からの出土であるとしても全く躊躇なく時期決定できるものは少ない。とくに、石鏸などの小さなものは包含層とともに遺構内に流れ込む可能性もあるため、時期の下がる資料は下限を決定するにすぎない場合もある。そうした、マイナス要因はあるものの、いちおう記載に際しては遺構の時期区分を指標として各時期ごとにまとめた。石器については「時期のわかるもの」に比べて不明のものが多いという現状のまま後者を除外することは問題があるので、時期別記載以外で代表的なものに限って掲載した。



2 弥生時代





- 1 59F
- 2 59E * 遺構のズレは、写真が同一縮尺でないことによる。
- 3 59H ** 59E・59G・59Hは居住域の外縁部寄りではあるが、内部の状態をある程度は予想させるものである。
- 4 59G
- 5 59J *** 59F・59I・59Jは居住域の内部と外部にまたがっており、遺構の密度の落差を良く示している。
- 6 59I 注意されたい。

I期～IV期の大別について

以下、事実記載を進めるにあたって、I期からIV期までに区分して説明する。そこで、予め当該区分について説明を加えておく。なお、土器の細別はまた後述する。

*

昭和57年 われわれは、昭和57年度の「年報Ⅰ」において、昭和56年度の調査成果に基づき、ほぼ現在の区分に近い大別区分を設定した。すなわち、本書におけるI期からIII期を「I期」から「IV期」に区分したのである。その準拠枠は、弥生中期後半代の編年として通用していた貝田町式・高蔵式（朝日遺跡編年を基準とする）⁽¹⁾であった。しかし、そこにおいて幾つかの問題点が生じた。つまり、既製の編年観との不一致が生じたのである。

（1）「I期」では、先行する朝日式に組成する甕にかなり近似したものやその変化した形と思われるものが出土した。果たしてそれらが確実貝田町式に組成するのかが問題となつた。⁽²⁾

（2）「III期」では、従来高蔵式として認定され一時期を画すと考えられていた一群に貝田町式的要素を強く持つ土器が共存し、従来の時期区分に疑問が生じた。⁽³⁾

（3）「IV期」では、従来「美濃形貝田町式」とよばれた条痕紋深鉢が共存し、これも既製の編年観に対する疑問を引き起こした。⁽⁴⁾

など、幾つかの疑問点が生じたのである。また、「IV期」の「高蔵式」に関しても、一体系統的にどこに帰属するのかなどが問題となつた。⁽⁵⁾

昭和58年 次年度（昭和58年）では、こうした疑問点などを踏まえ再検討した。その結果、従来の編年にはとらわれない立場で進め、「I期」→I期、「II期」→II期、「III期」→III期1段階、「IV期」→III期2段階に組み替えることにした。旧III期・旧IV期をIII期として一括したのは、貝田町式系土器群の消滅過程でありかつ凹線紋系土器群の出現過程であるという、どちらか一方にのみ注目するわけにはいかない複雑な時期であるということによっており、そのなかで前者が主となっている時期、後者の主となっている時期ということで分けた。しかし、段階を小時期区分としなかったのは、詳細な型式変化など土器個々の変化について十分把握していなかったからであり、あくまで便宜的なものにすぎなかった。これらのことについては「年報Ⅱ」で発表している。

これ以後は、この3期区分に弥生後期のIV期を加えた4期区分を阿弥陀寺遺跡における年代区分として適用した。

昭和59年 昭和59年度は、それまでの時間区分重視から地域差に視点を移して、阿弥陀寺遺跡出土土器群を「在来系」と「外来系」に区分したうえで、I期～III期までの区分との対応関係を中心変化を検討した。その結果、

(1) I期は壺以外では「朝日形」と呼んだ体部外面二枚貝調整の甕や、当時は未だ〈条痕紋系土器〉としていた一群の土器などによって特徴づけられることがほぼ確定した。

(2) III期は系統不明であった凹線紋系土器群が、中部地方以西の地方で広範に展開し、しかも畿内地方に限定されない成立過程をもつ土器群であることが伺い知れるようになってきた。その意味で、III期は阿弥陀寺遺跡であるとか尾張地方であるとか、伊勢湾地方であるとかいう範囲を超えた大きな変革期に相当するものであるという認識に至った。このことから言えば、III期をI期・II期に後続させるのではなく、凹線紋系土器群出現前後で大別してI期・II期として区分してもよかつたのであるが、この問題は遺跡固有の問題から離れて弥生時代論そのものとも関係してくるため、阿弥陀寺遺跡に関わる区分ではなくなってしまうということもあるので避けることにした。

このように内容を充実させた反面、問題点もいくつか残った。すなわち、III期を特徴づける台付甕がすでに1段階に在来系台付甕として成立していることがほぼ確定できたが、その先行形態のないことから出自がどこに求められるのかが疑問として残った。また、用語としての「在来形・外来形」の確定性と実態としての土器の整合が十分にうまくいっているとは言えず、課題を先送りすることになったのである。

* *

このように、I期は貝田町式を基礎に置きつつも壺以外では「朝日形」とした甕の存在によって確定でき、III期は凹線紋系土器群の出現によって画期とするという大きな枠組みができた。しかし、II期に関しては、資料の少ないこともあって、壺を除いてはI期とIII期の間という以上の積極的な特徴が掴みかねたままであった。したがって、全体に関わる課題としてはII期の把握が残ることになった。

* * *

事実記載について 一応上記の経過で大別区分に至ったのであるが、事実記載の遺構や土器に関しては、細別による説明を行っている。また個々の用語などに関しても、順序は逆であるが、第III章に関連事項の記載があるので、適宜そちらと対照していただきたい。

I 期

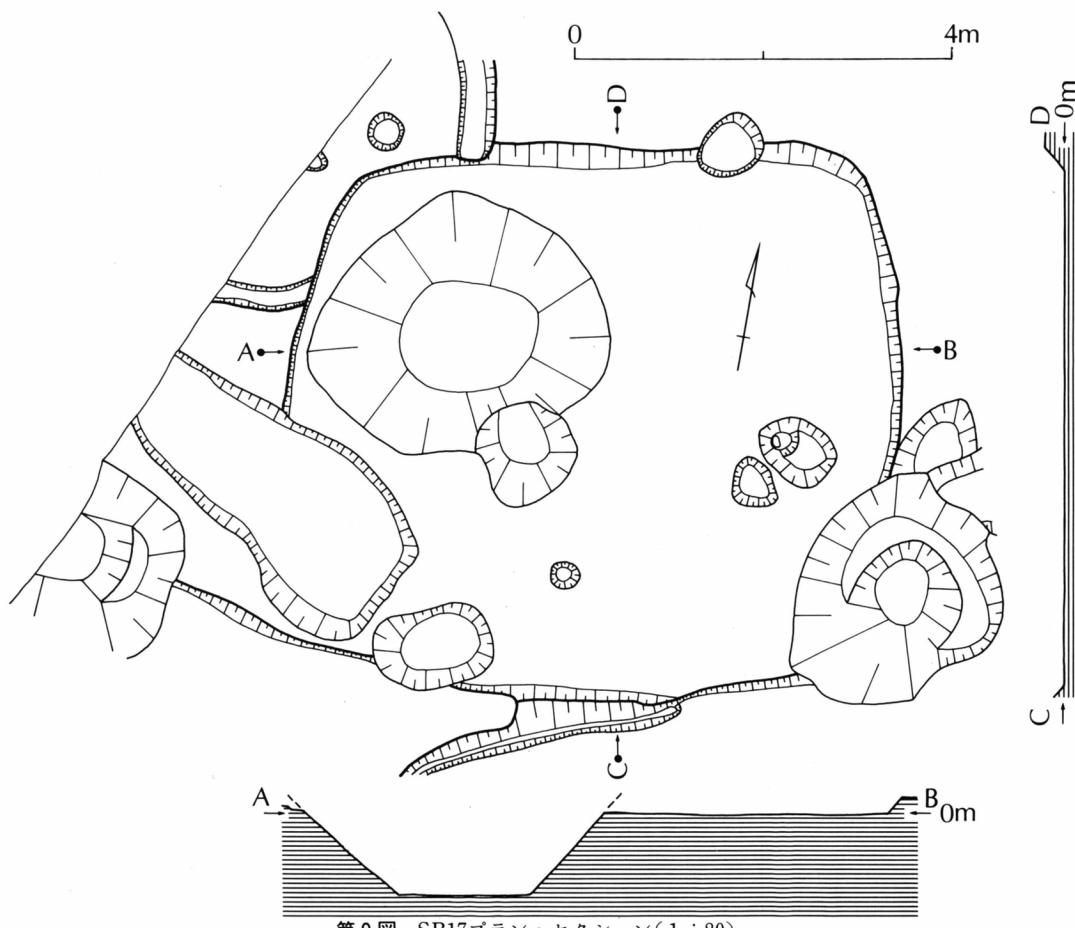
遺構

**S B15
(図版9)** プランおよび柱穴は不明である。掘形の深さは約45cm。床は、炭化物薄層と黄灰色砂質シルト層の互層からなる部分が少なくとも2面あるが、両者は不連続である。建て替えがあったのであろうか。I-1b期？。

**S B16
(図版9)** プランは円形と思われる。掘形は土層セクションで約25cmの深さを確認したが、検出時にはほとんど平坦であった。幅20~40cmの周溝がめぐる。

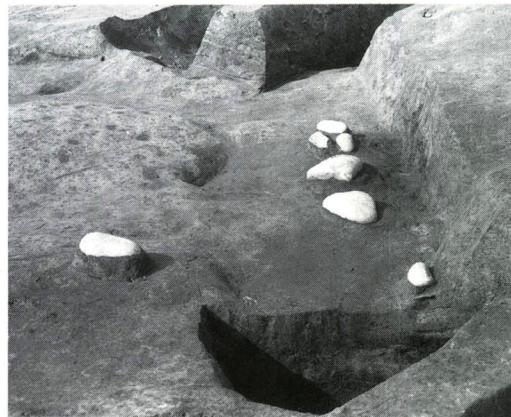
**S B17
(図版9)** プランは中軸線で約645cm×595cmを測るやや胴張り台形気味の長方形である。掘形は深さ約30cm。床面には炭化物が薄く散布していたが、貼り床の有無は不明である。柱穴および周溝は未検出である。I-2期。

**S B19
(図版9・14)** プランはやや台形気味の長方形である。長軸は640cm、短軸は短辺は不明だが長辺は推定で5m強を測る。掘形は深さ約45cmほど残存し周溝が西半分にめぐる。拡張を示すのか西辺側に周溝の残欠が2ヶ所ある。主柱穴は4本であるが、西側には小ピットが列をなしで集中している。

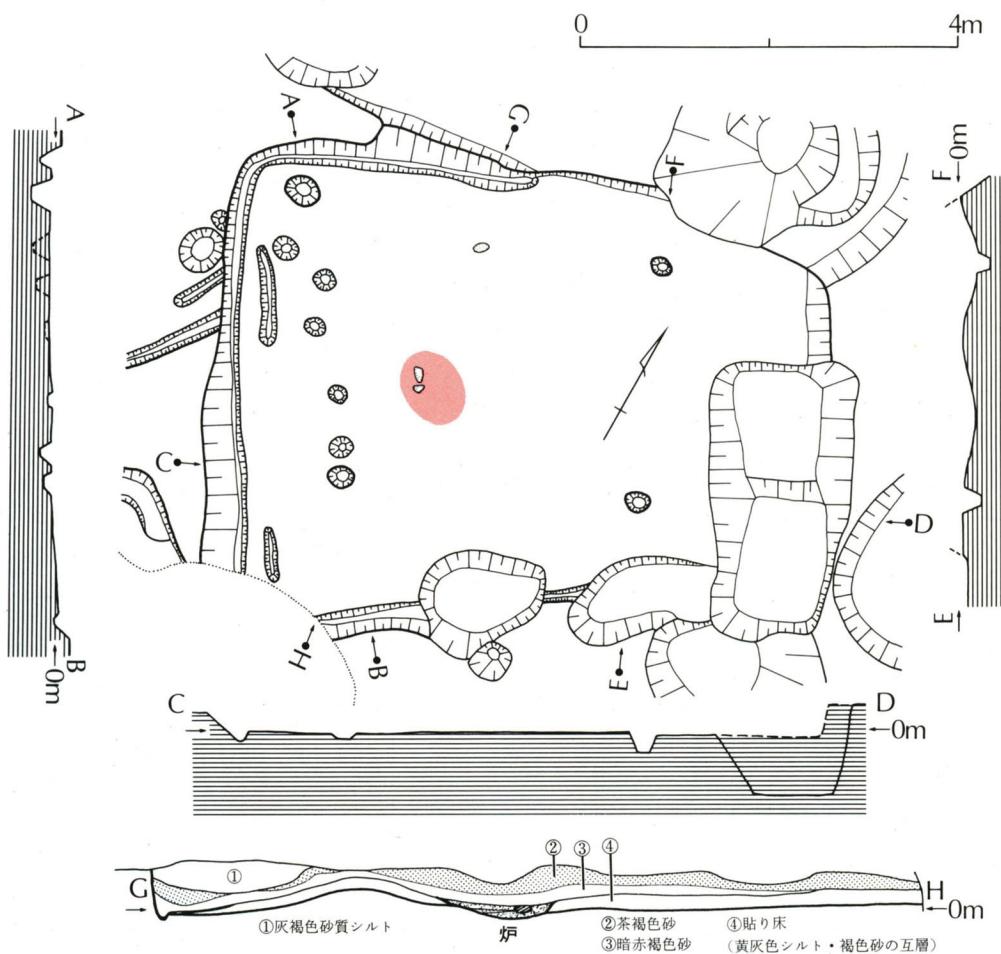


第9図 SB17プラン・セクション(1:80)

床面は平坦ではなく東半分で起伏が著しい。これは後世のもの（おそらく現代で重機の動いた軌跡）であろう。炉は地床炉で西辺寄りにあり、棒状のやや小さい河原石をともなっていた。炉石というには小さすぎる所以甕の底部でも固定するものであったかもしれない。貼り床は黄灰色砂質シルトと褐色砂の互層で炭化物層はほとんど挟んでいない。東辺周壁際には長径 36cmから 16cm の河原石 6 個が壁に平行して遺存していた。内 1 点は火熱を受けて赤化していたので炉石として使われていたものかもしれない。また、大きいものは作業台として使用されたのであろう。埋土上部は砂層からなり、洪水によるものであろう。I-1b 期～I-2 期。



第10図 東壁際河原石出土状態（南から）



第11図 SB19 プラン・セクション (1:80)
土層セクション (1:50)